第5回

HERMÈS

鬼才が紡ぐ上質世界

「ケリー」や「バーキン」に代表されるエルメスのバッグは、いくつになっても憧れの存在。上質にこだわって、時代の風を取り入れてきたエルメスが、2年前に鬼才ジャン・ポール・ゴルチエをデザイナーに迎えました。新生エルメスの行方はいかに……。銀座店リニューアル記念の商品も見逃せません。

撮影/森山竜男(モデル)、石井宏明(静物)　スタイリスト/橋本早苗　ヘア・メーク/渡邊昭一〈W〉　取材・構成/柳武麻実

完全無欠なブランド!?

中野香織

フェンシングの剣を手にして、レザーのコートをまとうモデルが、さっそうと歩く。「女王様!」になりそうでならない品格は、アバンギャルドな感性で知られるジャン・ポール・ゴルチエと、老舗「エルメス」の化学反応のたまもの。当初、誰もが驚いた組合わせも、三年目に入って、堂々たる安定感すら漂わせる。

とはいえ、「エルメス」が最高の強みを発揮する分野は、シーズンごとのコレクションよりもむしろ、「変わらぬ」ステイタスを誇るバッグであろう。馬車から自動車へ、と街を彩る乗り物が変わるクリティカル・ポイントに、馬具商だったエルメスは主力商品を鞍からハンドバッグへと転換したが、このときのエミール・エルメスの決断が、大正解だった。すなわち、職人による伝統的ハンドクラフトを守り続けること。フォードに象徴される大量生産システムが隆盛する時代に背を向けて、である。

職人の手作りだから、大量に作れない。入手困難。モノ余り時代に、ほかならぬこの希少性が、エルメスのバッグに別格のオーラを与えた。現代では、たとえば「一つだけ奇跡的にバーキンがあって、三十秒後にぜったいそこからなくなると思ったら、即、買っていた」とか、「ケリーのキャンセルが出たっていうので、実物を見てないけど、すぐに買うって返事した」という、冷静に考えれば摩訶不思議な購入動機があちこちでささやかれるほど。理性では説明のつかぬそんな行動に人を駆り立てるのは、エルメスのバッグのほかにはフェロモンぐらいか。

そんなエルメスのバッグとの遭遇率が高いように感じるのは、お入学式もさることながら、歌舞伎座やお茶の道場など、「和」な場所であったりする。エルメスと、和の文化。なるほど、伝統を重んじつつ革新をおこたらない姿勢に共通点がある。

ブランドが大衆化し、文化が商業化する一方の時代において、選民意識をくすぐる稀有なもの、という点でも通じるものがありそうです。

中野香織
服飾史家・コラムニスト。英国ケンブリッジ大学客員研究員などを経て執筆活動に。著書に『スーツの神話』(文春新書)ほか。ジャン・グリゾーニが装幀を手がけた『着るものがない!』(新潮社)を近々刊行予定。

進化するブランドSTORY

エルメスの歴史は1837年、高級馬具の製造工房から始まり、品質と技術を優先させる職人気質は、今日まで受け継がれています。1920年代には、鞍の特別な縫い方であるサドル・ステッチを使ったバッグや革小物で注目を集め、旅行用品、宝飾品まで手掛けるように。1937年には初のスカーフを発表。そしてモナコ王妃のグレース・ケリーにより、世界中に〝ケリーバッグ〟が知れ渡りました。1978年以降、エルメスの世界は充実の時代へ。ネクタイやプレタポルテ、香水に加え、テーブルウエアなどライフスタイル全般にわたる製品へと事業も拡大し、ブランドとしてのステイタスも確立。もうひとつの魅力は、1987年から年間テーマを設け、店舗のディスプレイや展覧会などが催される、アートとの関わりです。プレタポルテにおいては、1998年にマルタン・マンジェラが、2004年にはジャン・ポール・ゴルチエがデザイナーに起用され、新しい息吹と伝統とのコラボに注目が集まっています。

手放せないバッグたち

見ると欲しくなる……エルメスのバッグ。〈写真上〉新色は赤でもピンクがかった、明るいルージュガランス。素材はソフトなカーフ、トリヨンクレマンスで内縫いタイプ。「ケリー32」¥741,300〈写真下〉収納十分でフルオープンするから、出し入れも便利。落ち着いたカラーのルージュアッシュ。機能美を誇る新作の「サック・アン・ヴェ」¥663,600(ともにエルメス/エルメスジャポン)

〈写真上〉今季パリコレのフィナーレで喝采を浴びる、デザイナーのジャン・ポール・ゴルチエ。〈写真下〉今季コレクションより。千鳥格子のマニッシュなパンツスーツとお揃いの生地を使ったバーキンを携えて。ファー付きの民族調のポンチョが新鮮。ⒸSIPA PRESS/ORION PRESS